筑紫女学園大学リポジト

浄土真宗本願寺派教団と親鸞の「世のなか安穏なれ」　：　「親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区法要」を通して (二)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗山, 俊之, KURIYAMA, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/228

浄土真宗本願寺派教団と親鸞の「世のなか　安穏なれ」
―「親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区法要」を通して―（二）

栗山俊之

はじめに

本稿は、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要第六号所収の「浄土真宗本願寺派教団と親鸞の「世のなか　安穏なれ」―「親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区法要」を通して―（一）」の続稿であるが、紙幅の都合上、「世のなか安穏なれ　仏法ひろまれ　―時空を超えて―」現代劇のシナリオ、および法要パンフレットに親鸞劇の補足を兼ねて執筆した「親鸞聖人の御生涯」を掲載する。そしてそれらを基に、別稿によって、教団が法要のテーマとした親鸞の「世のなか　安穏なれ」と現在の本願寺派教団、あるいは現代社会との関わりについて考察したい。

一、現代劇

＊登場人物

佐野秀之（佐野家の一人息子・三五歳）、佐野時枝（秀之の祖母・八六歳）、佐野時枝（若い頃・二十一歳）、佐野秀一郎（時枝の夫・二六歳で戦死）、秀之の父（六五歳）、秀之の母（六〇歳）、少女（小学二年）、役場職員、復員局の職員、住職、兵士。

スクリーン映像が終わると、セミの声が聞こえてきて舞台に明かり。

舞台は福岡の真宗門徒の佐野家。

東京で働いているその家の息子の秀之が帰ってくる。（客席から登場）

秀之　もうすぐ家ばい。ゴールデンウイークは帰れんかったけん、なんか足が重かァ。（客席のお客様に）あれ、木村のおばちゃ

秀之、祖母がいる隣の部屋に行く

秀之　おばあちゃんただいまッ。帰って来たばい。

祖母　（ゆっくり振り返って）秀ちゃんね。（嬉しそうに）おかえりなさい。

秀之　おばあちゃん元気しとった？　調子どう？

祖母　（頷きながら）お陰さまで元気にしとるよ

秀之　良かった。この前のゴールデンウィークは帰らンでごめんね。友達と京都に行っとったとよ。

祖母　（すかさず）彼女ね？

秀之　もォ、おばあちゃんまでェ…ばってん、ここだけの話、そうなンよ。会社の後輩。父さんと母さんには内緒にしとってよ。

祖母　（笑顔で）わかった。誰にも言わんよ。

秀之　それでね、本願寺さんにお参りしてきたよ。おばあちゃん、お参りしたって言ってたの思い出してさ。はい、コレお土産。

祖母　気い遣こうてもろうて…ありがとうね。（貰った袋をおしいただく）

秀之　リビングにさ、お土産のお菓子があるけん、行こうよ。

祖母　じゃあ、よばれるかね。その前に秀ちゃん帰って来たから、阿弥陀様にお参りせなたい。

秀之　アッ、そうやった。

音楽が忍び込む。

父　んやない？変わらんね。相変わらず若かねえ。

母　お幾つになられたとですか？…〇〇歳。見えんねエ。どう見ても〇〇歳ぐらいやね

父　エ。（一つ下を言う。等々少しやり取り合って）…ア、早よ帰らな！そンじゃまた。

母　ただいま～ッ！

父　オゥ、お帰り。遅かったのう。

母　お帰り。

父　ゴールデンウイークも帰ってこンどってから。

母親が、台所から気づいて出てくる。

母　まあ秀ちゃんも色々あるとよ。お帰り。東京での仕事は大変やろ？

秀之　まァね。やっぱ九州がよかよ。

秀之　（袋を渡して）はい、お土産。ゴールデンウイークに…友達と京都に行って来たったい。

秀之　西本願寺にお参りしてきたよ。昔おばあちゃんが、本願寺さんにお参りしたって言いよったの思い出したけん。

母　友達て…彼女ね？　出来たとね？

秀之　違うって、友達やって。

母　（溜息）そうねェ…。三五歳にもなって、まだ彼女もおらンとね？　ア～ア、お母さんは、早よ孫の顔が見たかァ～。

秀之　（トボケた振り）おばあちゃん部屋に居るやろ？　お土産やってこ～ッと。

秀之、お仏壇に向かう。祖母もお仏壇に向かい、お土産を前に置く。
秀之、ろうそくを点け、線香を焚いて手を合わす。横で祖母も手を合わせお念仏を唱える。
リビングでは、父と母が、秀之から貰った本願寺のお土産を見ている。母は安穏エプロンを着て、父に「どう？」と見せている。
父も貰った扇子を広げてみる。扇子に『安穏』と書いてある。
音楽、消える。

秀之　じゃあ、おばあちゃん、すぐおいでよ。
祖母　（頷く）
秀之、リビングに行く。そこでは父がさっそく扇子で扇いでいる。
父　おう、コレありがとな。（扇子をかざす）
母　どう？　似合う？　（エプロンを見せびらかすように回ってみせる）
父　これ、本願寺さんのおみやげか？
秀之　そうだよ、何かその文字が書いてある商品がいっぱい売っててさァ。…ア、
（やおら観客に向かって）皆さんもおみやげにどうですか？
（出口を指差し）外のロビーに売ってますよ。
母　ン？（怪訝そうに）…秀ちゃん、あんた誰に話しかけようと？
秀之　それにしてもさあ、この『あ・ん・の・ん』ってどういう意味かいな？
父　そりゃお前、安穏として、ボサーっとしてから、ちゅう意味やろうもン？
秀之　（呆れたように）そんなこと、わざわざ書かンやろ？
母　そうねえ、普通は、あんまり良い意味では使われてないわよねェ。
リビングに祖母が入ってくる。
祖母　私ァは、その意味しっとるよ。
三人とも、ハッとして振り返る。
秀之　聞こえてたの？　おばあちゃん。
祖母　知りたいかい？
秀之　（頷く）ウン。
祖母　安穏っていうのはね、「みんなの本当の幸せを願う」っていう意味よ。
秀之　みんなの本当の幸せを願う？
祖母　そう、みんなの本当の幸せを願う。親鸞様のお言葉たい。
秀之　そうなんだ…。
祖母　親鸞様が関東におられるお弟子さんに書かれたお手紙の中に、「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」って、「世の中が本当の平和になりますように、そのためにお念仏のみ教えが広がりますように」っておっしゃっているンだよ。

秀之　親鸞様って関東にもお弟子さんがいたンだ。京都で生まれて、京都で亡くなったってのは歴史の教科書に書いてあったけど……。

祖母　九歳から二九歳まで比叡山で命がけの厳しいご修行をなされてね、自分の力では人生の迷いを解決することは出来ない事を覚られて、そこで「阿弥陀様の本願を信じて念仏する人は誰もが平等に救われる」とお念仏のみ教えを広めておられた、法然聖人の生き方に感動されて帰依しンしゃったとよ。

住職出てくるが、庭で中の話を聞いてる態。

秀之　おばあちゃん、帰依ってどういう意味？

祖母　人生の迷いを越えるには、色んな道があるけど、「私にはこの道一つ」って、行く道が定まることたい。

秀之　何かばあちゃんの話聞きよったら、お寺さんの話よりわかりやすかァ。

父、祖母に向かって合掌する。―住職、ガクリ。

祖母　（照れくさそうに、手で払う仕草をしながら）お寺で色んなご講師から、同じ話しば聞かせてもろうたから、いつの間にか覚えてしもうたったい。だけどね秀ちゃん、安穏を願って生きるっていうのは大変なことやねェ。

音楽が入る。

祖母　親鸞様は三五歳の時、朝廷からお念仏しちゃならんって、越後に、今の新潟県に流罪、島流しに遭われたんよ。それから関東に渡られて、そこでお念仏のみ教えをたくさんの人に伝えていかれて、再び京都に戻られたのは六十歳を過ぎられてからたい。

秀之　親鸞上人が流罪にあったのは、俺と同じ年の頃だ…。何で朝廷はお念仏する人を弾圧したと？

祖母　法然聖人は力がある人もない人も、お金持ちも貧しい人も、老いも若いも、男も女も関係ない、阿弥陀様の救いは平等て言わっしゃったと。だから、法然聖人のところに、今まで仏さまの救いから見捨てられたような人たちも沢山集まってきたンやろうね。

秀之　もともとお釈迦様が説かれた仏教は平等の教えやろ？　当然たい？

祖母　でもね、その教えは当時のお坊さんたちにはとんでもない教えに聞こえたらしい。

秀之　えっ、何で？

音楽、遠ざかる。

父　なんか話がややこしくなってきたなァ…？

住職　ここからはわしが話をさせてもらおうかのう。

父　アアッ、ご住職！いつから居ンしゃったとですか？

住職　さっきから…。お寺さんの話よりわかりやすかーっのところから。時枝さんのお話、大変興味深く窺っておりましたよ。私もお話に加えさせてもらってもよかですか？

一同　どうぞどうぞ。

祖母　すみませんご院家さん。サァどうぞ。
一同　どうぞどうぞ。
住職　では、おじゃまさせていただきます。
一同　どうぞどうぞ。
住職　（あがって）さっきのお話、わかりやすくお話しますから聞いてくださいな。
一同　ハイ。
住職　親鸞様の生きられた時代の仏教は、お偉いお坊さんが、厳しい修業を積んで、覚りに近づいて、仏さまになってから迷うている人を救うンだって考えられておったから、誰もが浄土に生まれて仏さまになるなんて教えを説いている法然聖人はけしからン、間違っておると奈良興福寺のお坊さんたちが怒って朝廷に訴えたンじゃ。
秀之　それで、法然聖人やお弟子の人たちは島流しにされて、バラバラになったと。
住職　それだけじゃなく、四人のお弟子さんは死罪。
秀之　お坊さんが死刑ってこと？――てことは、弾圧した人たちには、仏教の説く平等って意味が解らなかったってことですよね？
父　ウ～ム秀之、お父さんにはついていけなくなってきたみたいだ…
母　お父さん、がんばって。
住職　親鸞聖人は、人権とか尊厳とか、そんな言葉も考え方もない時代の中で、私たちは阿弥陀様から願われた、尊い命を今生きているンですよと仰った。だから私たちは、仏さまの願いを私の願いとして生きて行かなくちゃならン。今も世界中で差別や戦争は続いとる。ばってん、お互い拝みあって生きていかないかン。「世の中安穏なれ」って願いを生きた方が親鸞聖人だったンよ。
秀之　それはおばあちゃんの願いでもあるよね。おばあちゃん、俺が子供の頃、よく戦死したおじいちゃんのこと話してくれたよね。やさしい人やったって…。
祖母　本当に穏やかで、やさしい人やったよ。戦争は…そんな人にも殺し合いをさせようういうンやから…。私はね、あの人に赤紙が来た日のこと、今でもハッキリ憶えとるよ…。

音楽が入って、溶暗。
――以下、回想シーン。
スクリーンに『一九四四年（昭和一九年）』の文字。
夕刻、身篭った二一歳の時枝が家事をしている。部屋には粗末な箪笥と食台。そこに、仕事を終え、秀一郎（祖父）が帰宅する。
秀一郎　時枝、ただいま～ッ。
秀一郎の帰宅に気付くと、あわてて割烹着で手を拭い、重いお腹を気にしながら玄関口に向かい、頭を下げる。

時枝　お帰りなさい、お疲れ様でした。

秀一郎　（微笑みながら）ただいま。今日は身体の具合、何ともなかったか？

時枝　ハイ、おかげさンで。さっき、この子がね、お腹を蹴ってきよったンですよ。

（愛おしそうにお腹をさする）

秀一郎　（時枝のお腹に近づいて）そうか、そうかァ、じゃあやっぱり、俺の思うとった通り、男ン子ばい。

時枝　まだ気が早かですよ、ひょっとしたら、お転婆な女ン子かもしれませんよ。

秀一郎　（時枝のお腹をさすりながら、お腹の子に語りかけるように）よかよか、どっちでン。早よォ、生まれてこい。お父ちゃんに早よう顔ばみせやい。

時枝　（お腹の子に）せっかちですねェ、あなたのお父さんは。（二人顔を見合わせ笑う）もうすぐご飯の支度ができますけん、お茶でも飲んでゆっくりしとってください。

秀一郎　ああ、分かった。

音楽、消える。

秀一郎　（食台の近くに座り、新聞を読み出す）…新聞じゃ日本に都合の良かこつばっかり書いとるばってン、実際のところ、戦局は厳しゅうなるばかりじゃなかろうか…。

役場職員　ごめんくださーい。

時枝　ハーイ。

玄関に行こうとする時枝を秀一郎が制して。

秀一郎　ああ、よかけん、俺が出る。

秀一郎、玄関口に出てくる。

役場職員　佐野秀一郎さんですね。役場の兵事課の者です。召集令状をお持ちいたしました。

（敬礼し）おめでとうございます。

音楽が衝撃的に入る。

秀一郎　（大声に気圧されたように）あ、ありがとうございます…。

役場職員　それでは、失礼します。

秀一郎、呆然と力が抜けたように、食台の前に座り込む。

時枝　どなたでしたか？　どうされました？（秀一郎の持っている召集令状を見て驚き、その場にへたり込み秀一郎の顔を見る）あなた…。

秀一郎　何で…何でまた俺が召集されるとや…五年前に召集されて、やっと帰って来たと思うたのに…時枝、俺は戦争になんか行きとうなか。生まれてくる子供の顔を見ずに死にとうなか。

秀一郎、時枝の身体を抱きしめて、悲しさと悔しさを押し殺すように泣く。

暗転。

音楽、遠ざかる。

時枝（祖母の姿）に明かり。

祖母　そん日二人は、一晩泣き明かした。しばらくしてあの人は出征して遠い南の島に向こうて行かした。

―溶暗。

船底を洗う波音が聞こえてきて明かりが入ると、舞台は、輸送途中の船底。

秀一郎と数名の兵士が、窮屈そうに膝を抱えて座っている。

秀一郎　…それにしてン、こげなオンボロの輸送船しか残っとらんとやろうか、前よりひどかばい。

兵士①　まったくばい。あんた、何回目？

秀一郎　二回目です。五年前に中国の方に行っとりました。

兵士①　そうな、俺もたい。所帯は、持っとうとね？

秀一郎　はい。…女房ン腹ン中に子どもがおって、もうすぐ生まれてくるとです。

兵士①　そりゃァ気の毒ッかなァ…俺も子どもが三人おるとよ。昔は町で食堂やっとった。こう見えても、俺の作る料理は美味かて評判で、けっこう繁盛しとったとよ…ばってン、物資もろくに手に入らンごとなって、しまいにゃ配給制になって、とうとう、店ばたたまないかンごとなってしもうた。

秀一郎　そうですかァ…食べてみたかったなァ。

兵士①　戦争の終わったら、絶対また店始めるけん、そン時は食いにきンしゃいよ。（溜息混じりに周りを見渡して）こン戦争ももう長くは続かンばい。お国のために命ばかけとる兵隊さんば、こげな狭か船底にギュウギュウに押し込めやがって、俺たちャ、モノじゃなかとぞ！

兵士②　（小声で）オイ、滅多なこと云うもンじゃねえぞ。上官に知れたらタダじゃすまんぞ。

―と、爆雷の音が響き渡り、兵士たちが転げまわる。

音楽が衝撃的に入る。

パニックになった兵士たちの叫び声と怒号の中、大量の海水が流れ込んでくる音。

秀一郎　時枝～ッ、時枝～ッ！

音楽と水音、秀一郎の叫び声を掻き消すように盛り上がって、やがて遠ざかっていく。

―暗転。

時枝（祖母）に明かり。

祖母　あン人は、船もろとも深い深い海ン底に沈んでしもうた…戦死の知らせが届いたとは、昭和二〇年の六月。遺骨も遺品もなか、たった紙切れ一枚やった…戦争が終わって、生まれて間もない子ば抱いて、役場に行った時、小学生ぐらいの、やせ細った、おかっぱの女ン子に会ったンよ…ちょうどそこは、復員事務局の前の待合室やった…

―溶暗。

再び明るくなると、舞台は役場。

役場の復員事務局窓口に職員、台を挟んで少女が立っている。

少し離れたところ、待合室の椅子があり、時枝が赤ん坊を抱いて座り、何気なく少女を見ている。

少女　おじいちゃまが病気で来れんけん、代わりにうちがお父ちゃまのことを聞いてきなさいと云われたの。

職員　よく一人で来れたね。では、お父さまのお名前？

少女　杉山辰吉。

職員　ハイ、分かりました。調べるから、ちょっと待っとってね（帳簿を取り出し、めくっている）…（帳簿を繰る手が止まり、真剣な顔で少女を見つめ、意を決したように）…あなたのお父さんは…戦死しておられます。

少女　（眼を一杯に開き、唇をかみしめて、泣きそうになるのを一生懸命に堪えながら）…うち、おじいちゃまから言われてきたの。お父ちゃまが、戦死してたら、係りのおじさんに、おとうちゃまが戦死した所と、戦死したじょうきょう…状況ですね。

職員　ウン、それを書いてもらっておいでって。

少女　わかりました…じゃあ、おじちゃんが書き終わるまで、そこの椅子に座って待っててくださいね。

職員　少女、コックリ頷いて振り返り、待合席に座る。

職員、うつむいて書類を書き始める。

時枝　（少女の悲しみを察し、穏やかな、優しい声で）ひとりで、帰れる？

少女　（しばらく時枝の顔を見つめて）うち、おじいちゃまに言われた。どんなことを云われても、泣いてはいけないって。電車賃をもらって、電車の乗り方も教えてもらって。だから、行けるねって。

時枝　そう、偉かったね…

少女　（小声で）赤ちゃん、かわいい…男の子？

時枝　そうよ…

少女　うちも妹が二人おると。お母さんも死んだと…だけん、うちがあン子たちのお母さんになって、しっかりせんといかんと。うちは、泣いたらいかん、絶対泣いたらいかんとよ…

音楽が忍び込む。

時枝　（少女に返す言葉などなく、ただ小さく頷く）

職員　杉山さん…（書類を封筒に入れ、黙ったまま両手で少女に手渡す）

少女は書類を受け取る。

少女　ありがとう。

職員　がんばれ。

大事そうに肩掛けの雑納カバンに仕舞い込んでうな垂れる。

時枝は赤ん坊を抱いたまま跪き、少女の目線で少女の顔を見つめる。
少女は下唇をかみしめて、涙がこぼれぬよう、かっと眼を見開き、肩で息をしている。

時枝　（少女の手を優しく握る）おばちゃんも一緒に駅までついて行ってよか？

少女　…ウン、よかよ。

二人で歩き出す。

祖母に明かり。
祖母を残して、暗転。

祖母　戦争が何を生み出した。辺り一面の焼け野原。あン子のように親を亡くした子どもたち。子を殺された親たち…日本だけじゃなか。世界中で地獄・餓鬼・畜生の世界を作り出してしまったンよ。

音楽、遠ざかる。
舞台全体に明かりが入ると、現代の佐野家の仏間。
お仏壇を背に住職が座り、家族が向かい合って正座している。

祖母　…だから、私は、親鸞様の願いに本当に頷けるよ。これからの人たちが、本当に平和で尊い人生を送っていけるように…秀ちゃん、それがばあちゃんの願いたい。

住職　時枝さん…。

秀之　おばあちゃん…。

住職　敗戦から六十五年。私たちは、まさしくこの世に、地獄・餓鬼・畜生の世界を生み出しました。地獄とは、死んだ後の世界ではありません。踏みつけている相手の叫び声が聞こえない世界です。また踏みつけられた者の叫び声が全く相手に届かない世界のことです。餓鬼とは、他の命とのつながりを見失って、自分の欲望に終わりがないむさぼりの世界です。畜生とは、そのような自分中心の生き方を痛むことも恥じることも出来ない私たちの姿です。地獄・餓鬼・畜生を私たちの生き方に置き換えると、『戦争』『差別』『抑圧』の世界と云うことです。それは今もなお、起こり続けています。だからこそ、だからこそですね、阿弥陀様は、地獄・餓鬼・畜生の世界を造りかねない私たちの姿を見通されて、大きな悲しみと慈しみの心を起こされて、誰一人もらすことなく浄土に迎えるとお誓いになられたのです。その真実の命の世界からの叫び声が『南無阿弥陀仏』、お念仏なのです。

音楽が入る。

住職　阿弥陀様の願いを私の願いとして生きようとする生き方が、そこから始まるのです。

住職　それはまさに、世の人々の本当の幸せを願って生きるということです。
親鸞聖人の願われた「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」

というお言葉は、七百五十年の時をこえて、真宗門徒としてお念仏の御教えにめぐり会えた私たちが、そのお心を受け継いで目指していく世界なのです。

一同　（深く頷く）

住職　今日はお陰様で尊いご縁をいただきました。有り難うございました。それではご一緒にお念仏いたしましょう。

一同　南無阿弥陀仏…

秀之　今日は、安穏の本当の意味を教えてもらった気がします。

父　私もなぜ本願寺さんのお土産に『安穏』って書いてあるのかが、やっとわかりました。

住職　そりゃよかった。…時枝さんはね、私がこんな小さい時から（手で示す）お寺に参ってこられててね、いつも可愛がってもらいました。お話を聞くのもいつも一番前でね。私が、ご門徒の皆さんの前で最初にお話しした時もね、一番前で、かぶり付きで聞いておられて、あの時の緊張は忘れられませんよ。でも、有り難かったです。

祖母　まあ、御院家さん、恥ずかしい…。

住職　本当ですよ、（改まって）私は時枝さんにお育ていただいたとです。ア、そうだ、来年の親鸞聖人の七百五十回大遠忌法要の本山参拝のことで、今ご門徒さんにお声を掛けてまわっているンですが、時枝さんもぜひご一緒に行きませんか？

祖母　そうですねェ、行きたかばってン、私も八十六歳になりましたけん、皆さんに迷惑かけるとも気の毒かですから…

住職　そんなこと気にせんでも…

秀之　あのォご住職、その法要、僕も参加出来るとでしょうか？

住職　エ？そりゃもちろん。

秀之　じゃあ大丈夫、僕が付き添うけん。イイやろ、おばあちゃん。

祖母　ありがとう。秀ちゃんが一緒なら心強か。

住職　よかったァ。楽しみですね時枝さん。

祖母　ハイ、ホンに孝行者の孫です。…ア！それなら秀ちゃん、彼女も一緒に連れて来たらよかね。

父・母　彼女！

祖母　ゴールデンウイークは彼女と京都に行ったとやろ。

秀之　もォおばあちゃん、内緒にしとってって云ったやン。

祖母　アラ、そうやったかいね。最近物覚えが悪くてね。

一同、笑う。

音楽が入る。

母　そうですね。

父　今度福岡に帰って来るときは、その子も一緒に連れてきなさい。

秀之　…ウン。でも、お手柔らかに願いますよ。

一同、笑顔のうちに、溶暗。

音楽、盛り上がって、やがて消えていく

—終演。

二、親鸞聖人七五〇回大遠忌九州地区
法要パンフレット「親鸞聖人の御生涯」

①誕生　末法の世

挿絵＝親鸞聖人の姿

親鸞聖人は、平安時代末期の一一七三（承安三）年、京都日野の里で、藤原氏の支流日野家に誕生されました。父は有範。母については、古くから源氏の出といい、吉光女と伝えられていますが、それを確証する手立てはいまのところありません。貴族の権力が武士の実力によって奪われていくこの時代は、貴族にとっては没落の時代であり、不動と思われていた価値観がくつがえっていく時代でした。民衆は、貴族の支配に覆いかぶさっていく武士の支配によって、ますます疲弊していきます。時代はまさに、末法と呼ぶに相応しいものでした。源平の争乱や東大寺・興福寺の焼亡、養和の大飢饉など、政治不安や内乱、疫病の蔓延、天災などが次々と起こり、誰もが不安を抱えて生きていたのです。聖人もまた「安穏」ならざる時代にお生まれになったのであり、その意味で、当時と現在とは、非常に似通っているということができます。

②得度　国家のための仏教

挿絵＝青蓮院

聖人は、九歳になった一一八一（養和元）年、天台宗で出家・得度なさいました。天台宗は伝教大師最澄が、苦悩する民衆のために「一隅を照らす」ことのできる僧を養成しようと開いた宗派でした。しかし、聖人の得度の師であった慈鎮和尚慈円は、摂政関白九条兼実の弟であり、天台座主に四回も就任した人物で、その著書『愚管抄』には、国の支配と仏の教えとは車の両輪・鳥の両翼のごとく互いに助け合うべきであると述べています。彼は国家の繁栄を祈り、支配者たちの安泰を願うことを主とする、いわゆる鎮護国家の仏教を典型的に示す存在だったのです。貴族が没落していく時代にあって、聖人の父、弟たちともに相次いで出家していますが、一家にとって何か重大な問題が起こった事を想起させます。そうしたなか聖人の得度は、天台教団に身を投ずることによって、打開の途を見出すことができればという配慮によってなされたものだったのでしょう。

③比叡山　自力聖道門

挿絵＝比叡山での修行

天台宗比叡山での聖人の生活はどのようなものだったのでしょうか。『親鸞伝絵』によれば、〝天台宗の開祖智顗やその師慧思の教えを学び、さらに天台宗の教義実践の中核をなす空・仮・中の三観をなしとげ、当時の比叡山における教学の二大潮流の一つ、聖人が七高僧の六番目にあげる源信の流れに属していた〟といいます。また、聖人の妻、恵信尼公のお手紙からは、常行三昧堂の堂僧を勤め、弥陀念仏を修めておられたことを知ることができます。みにくい人間の現実、対立闘争に明け暮れる社会を離れ、浄らかな世界を求める浄土教にひき

つけられていかれたのです。比叡山において聖人は、師の慈鎮和尚慈円のような栄達の道を選ぶか、名利を捨てて人間としての向上と、よりよい社会の実現をめざす方向に進むか、選択を迫られる時があったことでしょう。そこで聖人は、善行をはげみ、浄らかな世界に入りたいと願い、精進努力する道を選ばれたのでした。しかし明らかになっていくのは、自らの力では、どうしても消し去ることのできない煩悩、たどり着くことのできない真実だったのです。

④在家　すべての人びとの救い

挿絵＝六角堂での夢告

比叡山での修学によって聖人は、仏教に関する多くの知識を得、膨大な経典に通じ、自分を厳しく律する意志を鍛えられたことでしょう。しかしながら、世俗的なものの一切を捨てて救われるとしても、それは自分ひとりだけのことでしかありません。民衆は、暮らしのすべてを捨てなければ聖人のような修学はできないのですから、ついに救われることはありません。すでに青年期を過ぎようとする二九歳になっていた聖人は、真の道を求めて比叡山を下り、聖徳太子が建立し救世観音を安置した六角堂で参籠をおこなわれます。政治の中心に身を置き、結婚生活を送りながら、そこに向き合う根拠を仏教によって確立した太子に、指示を仰ごうとなさったのです。そして九五日目の明け方、家庭生活を営みながら仏道を歩むことができる、すなわち、すべての人びとが救われる道があるとの夢告をいただかれました。そしてまた、雨の日も風の日も百日間、法然聖人のもとを訪ねられ、専修念仏によってすべてのものが救われるという教えに出遇っていかれたのです。

⑤信行両座　他力

挿絵＝吉水草庵

私たちは誰しも自己が存在すると思い、自己の力があると信じています。しかし、果たしてそうなのでしょうか。私が私としてあること自体、不可思議に存在するとしかいいようがないのではないでしょうか。聖人が比叡山で念仏を行じ、その功徳によって阿弥陀仏の世界に至ろうと励まれていた時、その念仏は自己の力に依るものであり、その効果で浄土に往生することができると考えられていたことでしょう。それが、法然聖人の導きによって阿弥陀仏の本願のはたらきに目覚め、自己への執着から解放され、他力の信に立った時、念仏は自分の力で真実に至るための手段ではなく、自分に与えられた真実そのものであったと気付かれたのです。自己の積み重ねる善行の効果を期待する立場から、永遠のいのちと光の世界に摂め取られている現実の自己の、不可思議な在り様に救いを実感することへと、聖人は転回なさったのです。そしてその阿弥陀仏のはたらきはすべての人びとに平等に与えられています。ここに聖人は、すべてのものが等しく救われていく道を歩みはじめられたのです。

⑥流罪　国家のための仏教との対峙

挿絵＝居多ケ浜

法然聖人のもとで聖人は、喜びに満ちた、充実した日々を過ごされ

たことでしょう。聖人は多くの門弟の中でも信頼に足る者にしか許されなかった法然聖人の『選択本願念仏集』の書写や、肖像を描くことを許されました。専修念仏の教えによって人びとは、念仏において自己のとらわれを翻し、与えられた真実の信心に基づいて、お互いの等しき尊さに目覚めるとともに、人びとを支配し、体制に従属させようとする権力や、それを支えてきた宗教教団から自律し、連帯していったのです。しかしそのことは、これまで支配の側が築いてきた秩序を無意味なものとすることでもありました。念仏弾圧の切っ掛けとなった『興福寺奏状』に、専修念仏教団には「国土を乱す失」があると指摘しているように、権力者たちやそれを支えている宗教教団にとって、新たに誕生し、拡大していく専修念仏教団は、支配体制をその根底から突き崩す危険な集団と映ったのでした。かくして住蓮・安楽ら四名が死罪に、法然聖人以下八名が流罪となり、聖人は越後に流されました。聖人三五歳のことでした。

⑦三部経千回読誦　衆生利益

挿絵＝関東への旅

流罪をとかれた聖人はやがて関東へ向われます。その途中、上野の佐貫というところで起こった興味深いエピソードを、恵信尼公のお手紙が伝えています。聖人は、飢饉によって明日を生きることさえ困難な状況に置かれた人びとを救おうと、三部経の千回読誦を思い立たれます。しかし、数日で思い返して中止され、自らが信じる阿弥陀如来のみ教えを人びとに伝えることこそが大切なのだと思い返されたというのです。このことは関東に向かわれる聖人の関心が衆生利益にあったことを窺わせます。経文を読むことによって飢饉を逃れることができるというような呪術的世界とは訣別したはずの聖人が、三部経の千回読誦を始められたのは、すぐにそうしなければと思うような苛酷な状況があったからに他なりません。けれども、そのようなことで人びとの苦しみが取り払われるのであれば、これほど容易なことはないでしょう。ほどなく迷いから覚められた聖人は、如来から与えられた信によって人びとが同朋として結び合い、支え合う、これこそが最も着実な救いであり、そのための伝道こそが聖人の、また信に目覚めた人のなすべきことであると再確認されたのでした。

⑧民衆とともに　御同朋御同行

挿絵＝上洛面談

関東在住二〇年の伝道、あるいは帰洛後の文書伝道等によって、多くの信を同じくする人びとの連帯が生まれていきました。聖人は、弥陀の本願に目覚めることによって、本願を与えられている身に相応しく生きようとされ、御同朋御同行の世界を築き上げようとなさいました。たとえば聖人は「下類」、すなわち当時の社会において「いし、かはら、つぶてのごとく」踏みつけにされていた、「漁師・猟師、商人、さまざまのもの」を「われら」と捉えられ、そしてその「いし、かはら、つぶてのごとくなるわれら」が、信によって「黄金」のような尊さを与えられることを明らかにされました。聖人の導きによって人びとは、自らの尊さを自覚し、「われら」を「下類」と蔑む価値観から

解放され、等しく尊い仲間として連帯していったのです。真宗の信はまさに、御同朋御同行という、すべてのものが等しく尊ばれる世界を具体的に生み出していく根拠でもあったのです。

⑨往生　生涯を振り返る

挿絵＝往生

一二六三年一月一六日（弘長二年一一月二八日）、善法坊にて聖人は浄土に往生なさいました。臨終の枕元には弟の尋有、末娘の覚信尼、子息の有房や数名の門弟がいたと伝えられています。九〇年に亘るそのご生涯は、真実の道に出遇われた喜びに溢れたものであるとともに、苦難に満ちたものでもあったと振り返ることができます。真宗の信によって「世のなか安穏なれ」との願いに立ち、その具体的実現をはかることは、それを損なうものとの対峙を不可欠のものとします。例えば度重なる念仏弾圧や、晩年それとの関わりの中で生じた同朋教団の混乱に真摯に向き合い続けた聖人の姿に思いを致す時、様々な問題が厳然として存在する現代社会にあって、聖人のみあとを慕う私たちは、多様な問題群を抱えながら如何に生きるのか、真宗の信に立とうとするわたくしたち一人ひとりの、決して避けることの出来ない課題としなければなりません。

⑩時空を超えて

挿絵＝大谷廟堂

聖人がご往生なさった後、末娘の覚信尼や聖人の教化を受けた門弟たちによって、東山大谷の地に廟堂が築かれました。廟堂は覚如上人の時に本願寺となり、紆余曲折を経ながらも今日までに、本願寺派（西本願寺）だけでも一般寺院一万ヵ寺・一千万門徒を掲げる大教団を形作るに至りました。真宗大谷派（東本願寺）もほぼ同様の規模を公称しています。加えて真宗高田派や真宗仏光寺派など、他にも聖人を開祖とする多くの教団があり、そのみ教えは、わが国において、最も多くの人びとに受け入れられていると言えましょう。にもかかわらず、現代社会を生きる私たちは、自己中心的な生き方を省みることを忘れ、欲望をむき出しにしてそれを恥じることもなく、その結果、社会に多くの問題を生み出しています。そして、聖人没後七五〇年を迎えようとしている今、各寺院、各組、各教区、そして本山では、「親鸞聖人七五〇回大遠忌法要」が厳修されます。「時空を超えて聖人は今」、私たちに何をどう問いかけられるでしょうか。今一度、聖人のご生涯やそのみ教えに触れながら、自らの生き方、この社会のありようを、見つめなければなりません。

おわりに

このシナリオおよびパンフレットに掲載した親鸞の生涯に関する解説文は、今、わが教団が安穏を掲げるということの意味を、その根底から問いたいという思いのもと制作したものである。本稿でも紙幅の都合上、その個々の意図について論じることはできなかった。別稿において詳述したい。

（くりやま　としゆき：現代教養学科　准教授）